

——— 幼子の時代のモーセ (0～3 歳) ———

(1～10 節) 2 章からモーセの物語が始まります。1、2 節「さて、レビの家のある人がレビ人の娘を妻に迎えた。彼女は身ごもって男の子を生み、その子がかわいいのを見て、三か月間その子を隠しておいた。」しかし、ついに隠し切れなくなっていました。母は我が子モーセを神様にゆだねました。家族みんなで力を合わせてパピルス（葦）で編んだかごを作り、その中に赤ちゃんを入れました。ナイル川の岸の葦の茂みの中に置きました。そのかごを少し離れた所で姉のミリアムがしっかりと見張っています。この時、母親の心は張り裂けんばかりではなかったかと思います。しかし、こうするより他にどうすることも出来ませんでした。家族みんなで祈りました。その祈りに答えるかのように・・・。

ファラオの娘が水浴びをするためにやって来ました。そして茂みの中にあったかごを見つけました。彼女は召使の女をやって、それを取って来させました。開けてみると何と、その中に子供がいました。6～9 節「・・・それは男の子で泣いていた。彼女はその子をかわいそうに思い・・・、その子を引き取って、（モーセの母が代わりに）乳を飲ませた。」この様にして、この幼子は救われました。それから何と王女は、その子の実の母を、それと知らないでモーセの母を乳母としたのです。不思議です。粋な計らいを神様はしますね。

この後、3 歳（あるいは 4～5 歳）になるまで、母は我が子を手元に置いて、世界を創造された真の神を教えました。わが民族の歴史を教えました。ヘブル人として生きることを教えました。

そしてその後、男の子は少年らしくなりました。母親の手から離されました。

——— 宮廷内でのモーセ (3～40 歳) ———

(10 節、読む) その子は、養子として正式に王女の住む宮殿に引き取られました。神様は、この幼子（将来イスラエルの人々を救う働きをするモーセ）をなんと、イスラエルの敵である、エジプト人の手によって、しかもその王宮の中で育てて成長させたのでした。そして、この幼子は、水から引き出されたので王女によってモーセと名付けられました。モーセとは、「引き出す」という意味です。ナイル川から引き出されたモーセは、やがてイスラエルの民を、エジプトから引き出す働きをするようになるのです。

——— 若気の至り、青年時代の失敗 ———

(11～15 節) さて、モーセは青年時代に、エジプトの宮中であって、今度はエジプト人が学ばなければならない、すべての学術を教え込まれました。英才教育を受けたのです。

そんなある日のことでした。(11、12 節)「こうして日がたち、モーセは大人になった。彼は同胞たちのところへ出て行き、その苦役を見た。そして、自分の同胞であるヘブル人の一人を、一人のエジプト人が打っているのを見た。彼はあたりを見回し、だれもいないのを

確かめると、そのエジプト人を打ち殺し、砂の中に埋めた。」

彼も 40 歳になっていました。その頃、外出した時のことです、エジプト人が、イスラエル人をひどく虐待しているのを見ました。彼は飛びかかって、そのエジプト人を打ち殺し、砂の中に埋めました。今、彼の胸のうちには、その同胞に対する愛が燃えていました。彼は「私はヘブル人なのだ」との自覚がふつふつと込み上げて来ました。彼は 40 年近くもエジプトの宮殿の中で、エジプトの学問を学び、訓練を受けても、やはり彼はヘブル人でした。

——— 背後にあった母の祈り ———

モーセが母と一緒にいたのはわずか 4～5 歳位まででした。きっとこの間、母は「あなたはヘブル人なのですよ」と教え続けたことでしょう。そして、可愛い我が子を手放してからも、モーセの母は、我が子のために毎日神様に祈ったことでしょう。宮殿の中にいても、モーセは、母の祈りによって支えられ、守られ、育てられていたのです。母の信仰と愛の影響力の大きさを教えられます。

しかしながら、ヘブル人に目覚め、正義感に燃えていたモーセでしたが、まだまだ未熟でした。今、彼は早まって一人のエジプト人を前後の見境なく殺してしまいました。彼がイスラエルの人々を救う器になるためには、まだまだ早すぎました。彼は神様から信仰の訓練を受ける必要がありました。そこで、(15 節、読む)「・・・モーセはファラオのもとから逃れ、ミディアンの地に着き・・・」と書かれています。ミディアンの地に逃れたのでした。

——— 荒野でのモーセ、40 歳～80 歳 ———

(16～25 節) モーセはエジプトに居づらくなって、都会のエジプトから田舎の更に田舎のミディアンの地に逃れました。もしもです、彼がヘブル人であることを隠してエジプト人として生きたならば、彼はやがてエジプトの王位を継ぐ者となったことでしょう。きっと、彼の一生はバラ色に満ちたものであったと思います。

しかし、ヘブル人であったことに目覚めた彼は、その民族の救いのために、彼はその約束された希望をすべて投げ捨ててしまうのでした。

ヘブル 11：24～27 節、「信仰によって、モーセは成人したときにファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。・・・信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。・・・」

こうして荒野のミディアンの地に逃れたモーセは、チッポラと結婚し、隠れた生活（将来の大事業に備えるための学び）が始まるのです。これこそが彼の本物の神学校でした。実にそれは 40 年間も続くのでした。

——— 時は満ちた、戦闘開始（80～120 歳） ———

（23～25 節）「それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らをみこころに留められた。」

神様は静かに、しかし確実にモーセを教え、訓練しました。

7:7 節「彼らがファラオに語ったとき、モーセは 80 歳、アロンは 83 歳であった。」モーセの 40 年間は青年時代、80 歳までは壮年時代でした。こうして 80 歳になってモーセは、やっと神の器へと成長しました。

でも、モーセはこのミディアンの地での 40 年間ですが、全体としては失意のうちに生活を送っていたのではないかと思います。「なぜ私はこんな所にいるのだ。何故なんだ！」

以前、エジプトの地で、あの時は、イスラエルの為と思って行動したことなのですが、殺人を犯してしまいました。その時の彼の正義の野心が今、砕かれつつあります。これは、これからのより良い奉仕への備えとなりました。

そして、イスラエルの民もようやく、苦しみの中から神に祈るようになりました。その祈りは神様に届きました。民の苦しみを神様は味わわれました。

今、やがて指導者となるモーセは砕かれつつあり、

民も祈り始める、そして、

神様もいよいよ立ち上がり始められました。

神様はイスラエルの民を「みこころに留められた」のでした。今、神様は静かに動き出されました。